

障害児に対する、身近な楽器による表現を促すための活動（第三報：エレキベース）

— エレキベースを取り入れた、表現を促進する働きかけの工夫及び「活動のダイアグラム」 —

（文中、Th.はセラピスト、Cl.はクライアント、エレキベースはベースとのみ記す。）

MGW研究所 都築裕治

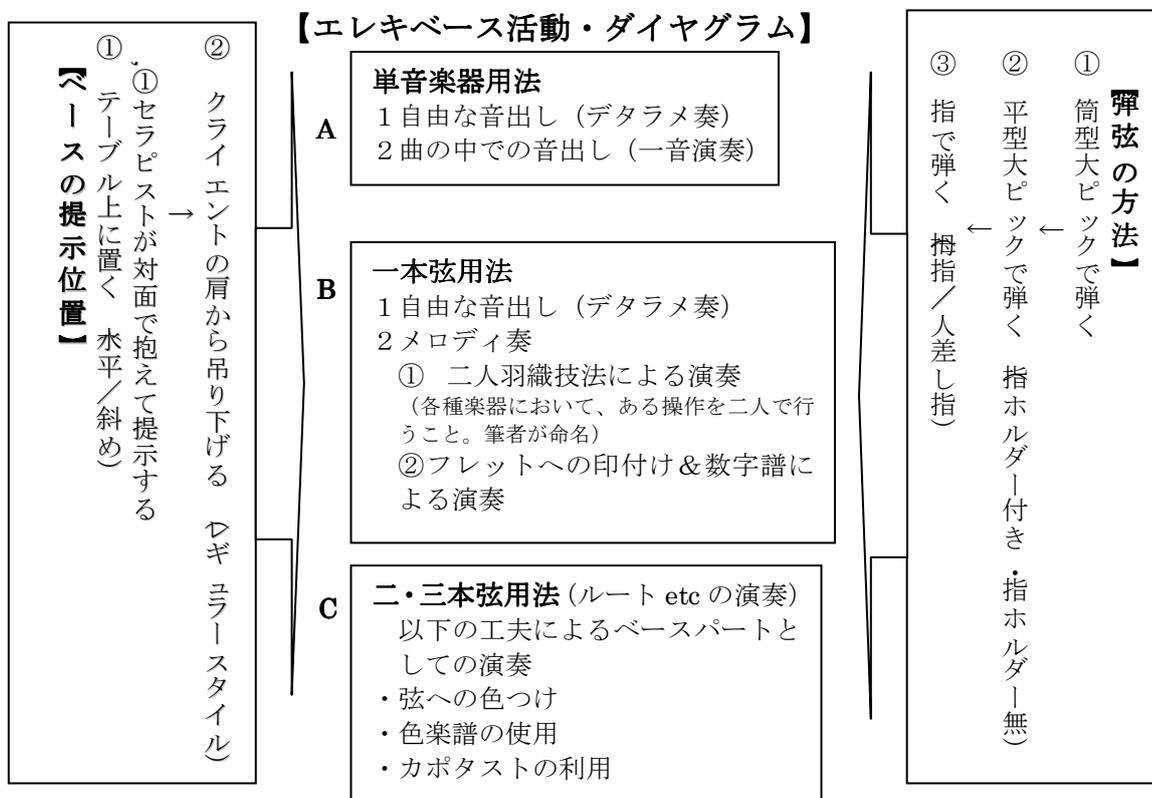
【はじめに】先に、「縦の発達」と「横の発達」という概念により、Cl.の現在持っている力の使いどころをそのCl.に応じて創出し提供することもTh.の役割であることを述べ、その展開例としてリコーダー（第一報）及びキーボード（第二報）を用いた活動について報告した。今回は、その同じ文脈においてベースによる活動を報告する。筆者は複数のCl.に対し、「横の広がり」を意図したベースを用いたさまざまな活動を工夫・実践しており、その活動事例における関わりや経過を検討することで、「ベースを用いた活動のダイアグラム」作成を行った。それを活動事例とともに報告し、Cl.の音出し表現を促すための一資料に資したい。

【対象者】知的障害を持つ9才～26才、25名。自閉症・ダウン症等。

【方法】Cl.の状態に応じて、以下の働きかけを行った。

- 1.提示位置の工夫
- 2.弾弦への配慮（特殊ピックの利用 etc）
- 3.単音楽器としての扱い（自由な音出し）
- 4.使用弦の減少（一本弦ベース～三本弦ベース）
- 5.音程取りの簡易化（・カポタストの利用・フレットへの色数字カード貼付 etc）

【結果および考察】上記の働きかけにより、Cl.それぞれの形でのベースによる活動が成立した。これらを整理・検討し下記のダイアグラムを得た。



- ・ **A1,A2,B1**：少しの操作でもアンプを通して大きく音が返ることで、ベースがCl.にとって応答性の高い道具となった。エコー技法、対話技法によりこれらの活動が促進された。
- ・ **B2:①**この方法により、ベースが簡易なメロディ楽器となった。②また、色数字譜は、第二報で報告したキーボードに関するシステムのベースへの応用であり、色数字譜でのキーボード演奏に慣れたCl.にとっては、ベースでのメロディ奏への展開も比較的容易となった（横への広がり）。
- ・ **C**:カポタストを使うことにより、開放弦や簡易な運指による音出しで曲への対応が可能となった。
- ・ ギターでもこのようなベースと同様の展開が考えられるが、上述の展開においては以下の点からベースの方が扱いがより容易である。①弦が太い ②弦と弦の間隔が広い ③フレットとフレットの間隔が広い。（なお、ギターではベースとは別の展開による実践をおこなっており、別途報告したい）

【終わりに】その時のCl.の持てる力は同じでも、活動で使用する“道具”と“使用法”を工夫することにより、Cl.の表現出来るものの変化してくる。それらの工夫はCl.の状態（発達段階・能力等）に応じて行われるべきものであり、このダイアグラムはCl.の状態にそった活動を考える際の「見取り図」としてTh.にその手がかりを与えるものである。それぞれのCl.の位置を見極めた展開をはかって行きたい。